



京王帝都電鉄



型破りな商人、浜田弥兵衛

「武蔵野」という言葉が、浜田山駅あたりにさしかかったとき、なつかしく思い浮んだ。宅地化され、駅前の商店街は広がり、にぎわいを見せているが、どこか郊外を思わせる落つきがみえるからだ。

浜田山は昭和四十四年の住居表示によって新しく誕生した町名で、これは旧高井戸村大字高井戸小字浜田山からとったもの。江戸時代、浜田山四丁目の樺島病院の裏手一帯はうっそうとした森林が続いていて、そこは江戸の商人浜田屋の持山だった。そのため明治十八年の地理調査の際に浜田山の小字名をつけたものといわれている。

さて、この浜田屋を築いた伊勢国三重郡浜田村出身の浜田弥兵衛^{やひべゑ}という人、随分と型破りでダイナミックな商人だったようだ。弥兵衛は元和年間（一六一五～一六二三）から当時オランダが中国の貿易を牛耳っていたために直接輸入ができなかった中国産の生糸を、御朱印船（幕府公許の貿易船）で台湾から輸入し巨万の富を得たのである。寛永三年（一六二六）には台湾南部を占領していたオランダ側とのトラブルで船を差し止められたことがあったが、弥兵衛はオランダの長官に飛び掛り、白刃を胸につきつけ生糸と賠償金を受取り、オランダ船二隻まで分捕って帰港したという。随分と荒っぽいエピソードの持ち主である。のち、彼は長崎を去り、江戸は新宿

で米穀問屋を始める。その彼がある日、大宮八幡宮（西永福駅参照）に参詣した折、そこから高井戸あたりまで足をのびし、付近の松林の美しさにすっかり魅せられてしまったのである。思いついたら即実行型である弥兵衛はすぐさま松林八町八反歩（約九ヘクタールほど）を買とり、そこに別荘風の下屋敷を造り、たびたび訪れるようになった。それから、誰いうとなくこの界限を「浜田山」と呼ぶようになったという。しかし、今はもうその下屋敷をしのぶことはできない。

善福寺川公園

弥兵衛にしてみれば本望であつたにちがいないであろうこの地名については異聞もある。浜田山の名は、松林の美しさに海を想ってつけられた名だというのである。また松林を寺の名にしてしまった松林寺^{しょうりんじ}が、高井戸東三丁目にある。いずれにせよ、危なげな人生を送ってきた弥兵衛や往時の人々がひきつけられたのは、松林の美しさだけではなく、その奥にひそむ武蔵野の自然のぬくもりや、やすらぎではなかったのだろうか。そんな想いを馳せてみようと、残念ながら松林は今では幻の彼方に去り、見ることはできない。美しかったであろう松林を想い散策することで我慢しなければならぬのは残念だ。

▲浜田山あんなこと・こんなこと▼

善福寺川公園（成田東）善福寺川の川沿いに細長く広がる緑地公園。桜やケヤキなどの木々が目につく。とくにエンジュの並木がすばらしい。都会ではすっかり消えうせてしまった原っぱが、ここにはまだある。近隣にある杉並児童交通公園の貸し自転車で、善福寺川沿いのコースを走ることができる。三月下旬から四月上旬にかけては桜が美しい。

